

---

# ありがとう

檸檬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ありがとう

### 【Zコード】

Z3314S

### 【作者名】

檸檬

### 【あらすじ】

如月ユイー 通り名：銀桜。家族から暴力を振るわれ、感情を、光を失った女の子。  
転校した高校で出会った全国？1暴走族白竜。  
個性豊かな彼らとの出会いに意味はあるのか——？

「グツ・・・・・！カハツ・・・」

狭い路地から聞こえる呻く声。

「ねえ、もうお終い？」

数分前まで数十人の男の声が聞こえたのに。

「喧嘩売る相手、間違ってるよ？」

その男達の中でただ1人立つて いる影。

「・・・・おまつ・・まさか・・・・・！」

蒼桜・・・・・！

まだ意識のあつた男が呟いた《蒼桜》

「…………正解。でも、もつ遅いから。」

蒼桜と呼ばれた者はその男の意識を飛ばした。

《蒼桜》…………1年前から急に現れた。  
汚い事を行つ族を潰していく。

性別不明。

名前不明。

容姿も分かつているのは、  
髪の色と瞳の色のみ。

「はあ…………」

蒼桜…………それは1人のある少女。

金髪にエメラルドブルーの瞳。

引きつけられるような綺麗な顔。

それが雨城瑠羽【アマシロルウ】彼女だ。

「明日…………か…………久しぶりだな…………」

彼女は明日から高校へ行く。

彼女はある人との約束のために行くのだ。

「ねえ . . . どうして私を人と関わらせるの?  
貴方はこうなる事が分かつてたの . . . ?」

彼女は独り、咳きながら眠りに堕ちた . . .

## Two

「うわー . . . カラフル . . . .

私は今校門の前にいる。

校舎は意外に綺麗だつたけれど、  
不良校なだけあって生徒はカラフル。

私は一応茶髪に茶色のカラコン。  
それより理事長室 . . . ビニ?

近くの不良クンに聞いてみよ . . .

「あの、 理事長室ってビニですか？」

振り向いた彼はモテる部類と思われる、  
整った顔 . . . イケメンだった。

「理事長室？ ああ、 1階の1番奥。

扉が目立つからすぐわかると黙つよ」

へえ . . . 意外と丁寧 . . . . 。

一礼してから理事長室に向かつた。

コンコンッ

「失礼しま . . . . . え？」

理事長室を開けて驚いたのは、  
中にいた人が漫画を読んでいたからじゃない。

「皐月 . . . 」

なんで?どうして貴方がここにいるの?

「勝手に入つてんじゃね . . . え . . . ?  
. . . . ッ! ? 瑞羽! —! —! —!

ギュッ . . .

「 . . . 久しぶりだね。皐月」

本当、久しぶり . . . 1年振りだね . . . . .

「瑠羽ッ . . . 僕らがどれだけ心配したと  
思つてんだよ！－－志紀の暴走止めるのも  
大変でッ . . . アイシ向回も死のうとして・・・

志紀 . . . なにやつてんの？黙田じゅん . . .  
志紀まで死んだら私も死んじやうよ . . .

「うん . . . めん、じめんね . . . 。  
でもこれだけは約束して？  
志紀には私の事言つてもいいけど、  
他は黙田だよ」

志紀は死なれちや困るから。

でも他の皆は死んだりしないだろう . . .

「でも瑠羽、ここに『昇田、転校生まだ？』

理事長室の扉が開き、誰かが入ってきた。

「つて何やつてんの！？転校生襲うなよーー！」

「なんで貴方まで？」

扉に背を向けてるから私の顔は見えない。

「離せよ、転校生」

「嫌だ」

「つーかお前女嫌いだよな！？」

「瑠羽は別だ」

「そうだろー？お前は瑠羽さんだけなら……え？」

「やつと……気付いたかな？」

「え？ ちよつ……瑠羽さん……？」

ゆっくりと皐月から離れて振り向いた。

「久しぶり、陸都」

少しだけ微笑んで言うと、  
陸都の瞳がウルウルしだした。

「 る ． ． ． 「 うわ ． ． ． ． 瑠璃 さああん ！ ！  
どんだけ 捜したと思つてんですかあ ！ ？  
こくら 捜しても 何も 分かんないしー ！ ！  
志紀さんも 帰いしー ！ ！ ！ ！」

さつめいた 内容を 聞いた われた ような ． ． ．

「 う ． ． ． 髪と 瞳 びしつた んですかー ！ ？」

「 スプレー と カラコン だよ 」

あの人が 綺麗だと 言つて くれた 色を  
手放す事は 出来ない。

「 よかつた ． ． ． もつ 逢えないと 思つて ました 」

「 ねえ ？ 皐月、 陸都 」

「 「 え ？」 」

「 時間、 ここ の ？ 」

「 ピピ — 応学校だから ヒヤとかないの ？ 」

「「あ……」」

恋れてたんだ . . . . . ?

「早く行けよ、陸都……」

「分かってるよ……行きましょ、瑠羽さん」

「でも本当吃驚しましたよ！」

アイツらも喜ぶでしょ「陸都」

廊下を歩いて、教室へ行く途中。  
陸都にも言わなければいけない事。  
言えば悲しむだろうけど . . .

「お願いがあるの」

「なんですか . . . ?」

大体予想がついたのか、顔が歪んでいる。

「志紀以外には言わないで欲しいの」

皆にとつて大切な人を . . .  
何千人の人に慕われていた人を . . .  
奪つてしまつたのは私だから . . .

「ツ・・・有輝の事は貴女の所為じゃない！一  
あいつ等だけじゃないんですつ・・・  
下の奴らも貴女がいなくなつて  
悲しんでた・・・」

だつて・・・総長だつた有輝がいなくなつて、  
蒼龍が解散したのは私の所為でしう？

「でも、私はまだ逢えない・・・」

「分かりました・・・志紀はいいんですね？」

「ええ・・・」

明らかに沈んだ陸都が教室に入つて行つた。  
ざわざわしていた教室も一気に静まる。

「瑠羽さん・・・どうぞ」

呼ばれて入つていいくとまた騒がしくなる。

「るせえ・・・」

聞こえるか聞こえないか位の声で呟いてるの

クラスはまた静まり返る。

陸都 . . . 一度キレたんだ . . . . .

「瑠羽さん、自己紹介してください」

「雨城瑠羽。よしひへ . . .」

あまりよしひへしたくないけど。

「席は後ろの窓際です」

やつぱ転入生ってそこなんだ?

日当たりよくてよく寝れそう . . . .

「 . . . . .」

でも何故か周りは空席。

まあどうでもいいや . . . . . 寝れれば。

早速寝る体制に入ると、周りがヒンヒン。

「おー、あの子ヤベヒって

「陸都さんの授業で寝るなんて  
死ににこくよつた物じやん……」

ガラッ

「つづくん遅刻してー」めーくん……」

「世間ねはなー」

「すこませこ」

「眠……」

「……」

・・・・・ 煩い。

「またお前等か……遅刻ばつかりじやねえか」

陸都も呆れて怒れない程遅刻してんの?

「あれー??あの子誰?」

「顔見えないー!!」

明らかに私の事だよね。  
でも無視していいか . . . . 眠いし。

「うるせえ！－！瑠羽さんが起きるだろ！－！」

いや、起きてるんですけど。

「陸都 . . . 五月蠅い」

「す、すみませんっ－！－！」

そんなにどうもらなくとも . . . .  
確かに寝起きは悪いけど。

「えー！－！－！つづくんが謝った！－？」

「さん付け！－？」

この一人 . . . 本当五月蠅い。

「あれ？君、迷子の子だよね？」

一番まともそうな人を見ると、確かに見た事ある様な無い様な・・・

「もしかして覚えてない?

昇降口で会つたんだけど・・・」

あ、あれだ。理事長室聞いた人。

「覚え「瑠羽さん俺よ「陸都

「はい・・・すみません」

少しばらしある着きなさいよ・・・教師なんだから。

「取り敢えずお前等席座れ・・・」

席に座る時女子に睨まれた理由分かった。  
席順がこんなんだからか・・・

窓 男男  
窓 男男男  
窓 私空空

でも、いれぱかりはどじうにもし・・・こや、でれる。

私が言えれば席を変えてもらえるだね。

でも、慈際がいいし。これでいいか。

「ねえ名前なんて言いつの~。」

前の席の女顔負けの可愛い男の子が話しかけてきた。

「雨城瑠羽・・・」

普通に「こなり」と聞き返すと「だらうけど  
関わるつもりないから必要ない。」

「僕は山岸歩夢【アユム】よろしくねーーー！」

「歩夢抜け駆けすんなーーー！」

「俺、椎名千年【チトセ】よろしくなつ

「俺は加島昂【スバル】よろしくね瑠羽ちゃん。  
後、この眠そうのが白崎陽【ハル】。」

「それと佐竹稜【リョウ】【ウ】」

何故か自己紹介してもらつた。

「女・・・お前俺に近寄るなよ・・・」

そして上から目線な白崎陽。

・・・・・自惚れないでよね。

「白崎！…お前瑠羽さんに向かっ」陸都

流せばいい物をつかかる人がいるから。

「私は貴方に限らず他も関わるつもりはない」

無表情ではつきり言った。

女に初めて言われたのか、驚いている。  
・・・・・めんどくさい。

「はあ・・・陸都、帰る」

もともと財布と携帯、予備のスプレー、  
カラコンのケースしか入っていない  
鞄を持ち席を立つた。

「明日おやさんと来てくださいよ。」

「いつも簡単に早退を認めていいの?  
まあ楽でいいけれど。」

「分かってます。じゃあ

微妙に疑われてるようだし、  
住所でも送つとくか……。

T.O.・陸都

家、学校から10分位のマンションの  
最上階

T.O.・瑠羽さん

さすが瑠羽さんですね!!  
ありがとうございます!!

授業中の筈なのに返信ある . . . . .  
それって教師としてどうなの?

ううううう . . . . .

家でボーッとしている  
不意に携帯がなった。

——着信 志紀

一年前から毎日何度も鳴り続ける。  
皆、毎日メールと電話をしてくる。

「もしもし、志紀？」

志紀の電話なら出てもいいかなと思つて  
受話ボタンを押した。

「一ツ……ルウツ . . . . .」

後ろから声が聞こえるから、  
皆も一緒にいる。

「ルウ . . . 会いたいよ . . . . . !

俺、ルウがないとつ . . . . .」

弱々しい声に陸都と皐月の言つていた事は  
本当なんだと確信した。

「私も志紀に会いたい . . . . .

もうすぐ会える筈だから。

死なないでね . . . 蜜と大翔には内緒だよ」

「ほんとに . . . . ? 会える？」

「うん。陸都と皐月に聞いてみて?

じゃあそろそろ切るね . . . . .」

「嫌だつ . . . ルウ . . . 嫌ツ . . . ブチ . . ツーツー」

志紀、すぐ。会えるよ——。

「あの . . . 瑞羽さん？」

「ナニ」

志紀の電話に出た日から三日たつた。  
次の日でも来るかと思つたけど、  
動きはない。

「志紀さんと話したんですか？」

「ええ」

朝の静かな廊下を彷徨いでいると、  
陸都に会つた。

「 . . . やつぱり。だからか . . . うん」

一人で納得しないでよね。

意味不明な陸都を置いて教室へ戻つた。

ガラツ . . .

不良達の視線が一気に集まつた。

「あーー！瑠羽ちゃんやつと来たあつ」

その中には屋上の5人の姿も。

ツチ・・・周りの席はこいつ等だつたか・・・

「鞄あるのにいなから搜してたんだぜ？」

なぜ椎名千年達に搜されんの？

「ビリ」 「席つけ～」

タイミングよく陸都が入つて来て、  
HRが始まった。

「転入生がいる。入つてください」

そんな陸都の言葉も聞き流して、  
空を見ていた。

女子が奇声をあげてるから、  
イケメンなんだろうなあ・・・・・・

「・・・・・ツルー」

切なそうに、震えた声で私を呼ぶ。

一年前のままの姿を瞳に映して彼を呼ぶ。

「――志紀・・・」

少し。少し微笑んで志紀の名を呼ぶと、  
周りそつちのけで早足にこつちへ来た。

「見つ、けた . . . ルー」

ぎゅうっと抱き締められて香る匂いに  
なんだか落ち着いた。

会わなかつたのは、自分の意思なのに。

「し、志紀さんつ席は . . . 」

「ルーの横」

「 . . . ですよね」

恐る恐る聞いた陸都に田もあわせず、  
私を抱きしめたままの志紀に陸都も呆れ氣味。

「 . . . は？え、瑠羽の知り合い . . . ？」

やつと反応を起こしたのは椎名千年。  
それに何故か呼び捨てだし。

「ルー . . . 「志紀、サボるつか

志紀が聞きたい事、言いたい事は  
関係ない奴らに知られたくない事。

「ええ！？堂々とサボらないでください」――――

微妙に教師らしい事を言つた陸都は無視して教室を出た。向かつたのは

．．．．．——屋上

「．．．．ルー．．．俺を置いてかないで．．．．．．  
俺は、ルーが居ないと駄目で．．．」

今は六月で暑い。日陰に座つた志紀の足の間に座らされて後ろから抱き締められる形。

「もしかしたらラツルー死んでるかもしねない  
つて思つて何回も死のうとした。  
全部、皐月達に止められたけど」

志紀が泣いているのか、体が震えている。

「志紀、ごめん。置いていつてごめんね。  
次どこか行くときは志紀も一緒だよ」

本当にあの時は有輝の事しか考えなくて他まで頭が回らなかつた。

「．．．．本当に？」

「うん。皐月達にはお礼言わなくちゃね、  
志紀を止めてくれてありがとうって

「ん．．．」

泣き疲れたのか志紀はそのまま寝てしまった。  
私も動けないから寝てしまおうと瞼を閉じた。

-----

-----

-----

「…………やん…………る…………ち…………瑠羽ちゃん」

「……………ン…………ン…………」

周りの五月蠅さに瞼を開けば、あの五人。  
立ち上がりうつにも体が動かないし……

「志紀、志紀起きて」

手を揺り起しそば田をあけた。

「ルーが先に起きるのって珍しい」

「志紀がこんな所で起きないのも珍しい」

志紀はゆるゆると頬を緩め笑うと  
抱き締める力を増した。

「ストップ!! 僕等の存在 a11無視! ?」

無駄に綺麗な英語の発音。

「ルー、此處五月蠅い」

「無視しとけばいいよ」

自分の認めた者しか視界にいれない覚えない  
志紀は椎名千年を知らない。

「瑠羽ちゃんサラッと酷い事言つたよね！？」

五月蠅いのは2名。後は静かだし。

「やつぱり場所移動しそう、志紀」

「ん」

山岸歩夢もムシすると、  
隅で2人がいじけ始めた。・・・放置するけど

「臥龍【ガリュウ】」

ドアノブに手を掛けた時、  
佐竹稜が口を開いた。

「知ってるか？」

何を言い出すのかと思ったら・・・・・

「 . . . 全国N.O.・1暴走族」

本当は有輝達がN.O.・1だったのに。  
有輝の死によつて解散してしまつた。  
. . .  
私の、所為で

「貴方達でしょう? 臥龍総長、佐竹稜」

「知つ、てた . . . の . . . ?」

明らか過ぎる程動搖している山岸歩夢。椎名千年も明らか過ぎる。

後の二人も分かりにくいけど動搖してる。

「当然」

私が知らないからこいつ態度だと  
思つてたんでしょうね。でも、違う。

「じゃ、なんで . . . ?」

「興味ナイ」

蒼龍の深い絆を壊したのは私。

あれ程信頼しあっていた暴走族だったのに。  
大切な人を奪つてしまつた . . .

「分かつたらもう関わらないで」

踵を返して屋上を後にした . . .

バンッ

「 霧月、 陸都呼んで」

理事室に行くとソファでロウをしてる霧月。

「俺、いますよ」

お茶を4つ持つた陸都がでてきた。  
流石、 気配で気付いたんだろう。

「蒼桜、あれ私」

陸都のお茶を飲む手が、  
霧月のDSを操作する手が、  
志紀の私の髪を撫でる手が止まった。

「 「はあああ！？」「

「 瑠羽確かにお前の容姿と一致するが  
お前は喧嘩も俺等より強いが！！！！  
お前夜行性じやないよな！？  
夜めちゃめちゃ弱いよな！？」

「 瑠羽さん何危ない事してんですか！？」

汚い族一人で潰してるらしいですよね！？

今度から俺も連れてつて下さい！？

志紀は何も言わないけど、  
多分、呆れてる。

「ねえ志紀、家どうしたの？」

地元から此処までそう離れた距離じやないけど  
蒼龍の倉庫に住んでる志紀にとつては遠い。

「」つちで住むけどまだ見つかってない」

「じゃあ、私の家に住む？」

つていうか住んでほしい。

「住む」

志紀に私の心情が分かつたのか、志紀自身私が必要なのかわからぬけど恐らく両者だろう。

陸都の言葉は志紀の殺気により抹消。

「瑠羽と志紀そろそろ帰れよ。

とつぐに下校時間過ぎてゐるぞ」

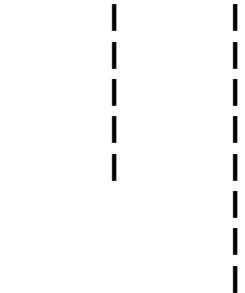
珍しく皐月が教師らしい事を言ったのに理由がなんとも自己中。

「お前等が帰らねえと俺が帰れねえ」

．．．いや、皐月らしき。

「分かつた。帰らう志紀」

フЛАリと立ち上がりつて校舎を後にした。



「志紀、気付いてる?」

「ああ」

誰かに『尾けられてる。学校をでた辺りから。

「撒くよ」

曲がり角をいきなり曲がって、  
上へ、塀に飛び、屋根に飛び乗った。

「．．．ッ!? 捜せつ」

「どこに行つた!!」

複数の男達が走り去つて行つた。

「アレ……何処だと思つ？」

「臥龍 . . . . .」

やつぱり。

あいつらも馬鹿ね . . .

「面倒な所に会つたわね . . . 臥龍」

「一つの影は刃に照りされ闇に消え去つた . . .

「志紀、この部屋使つていいから」

臥龍を撤いた後、家へすぐ帰つた。

「ルー、」飯 . . . . .

ソファーに寝転がった志紀が言った。  
冷蔵庫を確認してみるも、空。

「材料買つて作るかコンビニ、フードマース  
どれがいい？」

「コンビニ」

相当お腹空いてるんだろうね、  
いつもなら作つてつて呟つんだけど。

「分かつた。行こう」

一番近いコンビニは歩いて五分の近場。  
かなり便利で日々に来て一週間も経つてない  
けど何回も行つている。

「 . . . ソレ」

夜道の中、志紀の視線は首もと。

「 . . . . . 」

首からぶら下がっている一つの指輪が通った  
ネックレス。

「有輝の葬式の時無かつたから探しした . . . .

一つは私の物もう一つは有輝の物。  
同じ指輪が志紀の首にも掛かってる。

「じめんね。ほら、着いたよ」

学校でもつけているけど制服で隠れて  
見えなくなってる。

今は私服だから普通に見える。

「ルー、それだけ？」

コンビニに入り私が手に取つたのは  
ミルクティーのみ。  
はあ・・・と志紀にため息をつかれて  
渡されたのはメロンパン。

「いらない

「ダメ」

「こりない

「ダメ」

渋々レジに持つていった。

「あーっ……」

お金を出せりつとした時叫び声が。  
Jのコンビニ内で。

「瑠羽ちゃんと志紀くんだあ！！

僕ねえジャンケンに負けちゃつて  
パシリにされちゃつたんだあ」

山岸歩夢の事なんて聞いてないし。

「あ、そうだ！――一人共倉庫にこない？

ついでに拒否権ないからね」

答える暇も無いまま外見へ出て車に

乗せられた。勿論コンビニでお金は払ったけど。

「みつんなーただいま

」



私達は引き摺られる感じで

倉庫の幹部室っぽいところに連れてこられた。

「おー歩夢おかえ……つって瑠羽ちやーん……」

「瑠羽ちやん」んばんば

「は？」

「……」

山岸歩夢が中に入つていった事で

扉の前にいる私が見える。

志紀は扉の横に立るから見えないけど。

「ほり入つて来なよ……」

山岸歩夢が私の手を掴んでぐいぐい引っ張るのが気に障ったのか志紀が空いてる手を引いて引き寄せた。

「ルーに触るな」

必然的に志紀の姿も幹部室から見える。

「……え? あ、『めん……?』

別にそこは謝るどこじゃないけど。  
ただ志紀が独占欲強いだけだし。

「ねえ、聞きたい事あるんじゃない?」

さつきから加島昂は探る目で見てくるし  
佐竹稜も見てくる。

白崎陽に至つては睨んでくる。

「…………何もない」

佐竹稜が言葉発したの初めて聞いた。

「そり。じゃあ一つだけ言わせてもらひ。

尾行なんて悪趣味

自分でも驚く位の冷たい声がでた。  
きっと瞳も冷めてただろつ。

「…………」

目の前の五人が固まつた。

「…………帰れ…………」

睨みが一層厳しくなつたけど無意味。

「随分と偉い身分だね。

自分達が連れてきておいて帰れ?」

ま、帰らしてもうつけど。

「帰れッ！！」

怒鳴り声に我に返つた4人が白崎陽を  
抑えている。

「瑠羽ちゃん。悪いんだけど、

帰つてくれる？陽もこんなんだし・・・」

加島昂、怒り。抑えきれてないけど。  
でも私は悪くないよ。本当の事だしね。  
「やめひなら」

ーガラッ

「 「 「 . . . . . 。 」 」 」

教室に入れば全員「ちらをむいて  
半分睨まれてるっぽい。

まあ? ここは学校ほぼ臥龍だからね。  
昨日の幹部室での件でしょ。

「瑠羽ちやんおはよー」

そこには幹部達もいるのは当たり前。  
でもね、

「話したくないのに無理しなくても  
いいのよ? . . . . 山岸歩夢」

山岸歩夢は人懐っこくしてるのでバレバレ。  
私の事、嫌いみたい。

「 . . . . なんの事?」

ほら、声のトーンも落ちたし  
口調も変わった。否、戻った。

「別に？」

鞄を机に置くと志紀は引つ張られて教室をでた。

「志紀へどい行くの？」

「…………。」

「しーべーへー

ーデンツ

「…………志紀？」

廊下の壁におしつせられた。

「…………ン・シふ・あ・・・し、モシ」

いきなりキスされたけど初めてじゃない。  
志紀には何度もされている。

やっと唇を離したらジッと私の顔をみて  
悲しそうに、

「俺、嫌い？」

と震えた声で聞いてきた。

「えりこひめの？」

「だつてルー俺放置したから . . .」

「ああ、山岸歩夢と話してゐる時か . . .」

「好きだよ。志紀いないと死ぬかも」

有輝が、有輝が殺された時も  
死のうかと思つたし。今も、ね？

「俺も、死ぬ . . .」

大袈裟だと思うかもしない。  
だけど、これは本音だから。

「もう、俺の前から消えないで . . .」

ぎゅっと抱きついて来る志紀の香りに  
安心して、胸に顔を埋めた。

「うん。約束」

「じゃあ俺とも約束して下さつよー

「. . . . .」

「. . . 陸都」

「陸都、授業は . . . ?」

教師といつ立場である陸都は  
今は授業中のはず。

「おー一人がいなかつたから自習にして  
探しにきました」

やつぱり陸都は天然 . . . . .

「携帯、あるでしょ？」

番号変えてないから繋がるんだけビ。

「あーーーやつですね！気付きました～」

あははーと笑う陸都は子供っぽくて、  
教師にはみえない。

「授業、しなきや駄目でしょ。教室歸るよ」

ガララッ

「志紀さんつなんで怒ってるんですか！？」

卷之三

「志紀れあ～ん（泣）ーー。」

גַּתְּרָה

ねえ、教室の人達ガン見してるよ？  
これでもかつて位目見開いてるよ？

「陸都、授業」

はあ。面倒。

「あ、そうですね。席ついて下さい」

ずっと不機嫌な志紀にピクつきながらも授業を始めた。

「ルー授業サボりたい」

ぎゅっと抱きついて首に顔を埋めてきた。  
あ、今の状況はといふと  
志紀が座った隣に座るうとしたら  
引っ張られて膝に乗せられた・・・って感じ。

「駄目だよ。陸都がまた探しに来る」

そつなればさらに不機嫌になる。  
またり抱きついてたのに陸都が乱入してきて  
不機嫌になつてたんだから。

「こんなのが出来る」

確かに△△の授業は簡単すぎる。  
今やつてるとひだつて中学の範囲。

「寝てもこよ」

眠れなかつたと思うから . . . .  
私が側にいなかつた時。

「ん . . . .

抱きしめる力が強まつて寝息が聞こえた。

変わつてないね、志紀。

有輝達と出会つた時も私しか視界に入れなくて、  
みんな頑張つてたよ？

話した時は凄く喜んでた。

「 . . . . 有輝 . . . .

私が、みんなが会いたい人の名は

授業が終わり煩い教室に焼き消された . . .

「ルー . . .

「うん、行こう」

志紀に連れられて教室を出た。

ガチャ

ノックも無しに勝手に入ったのは理事長室

「勝手に入つてんじや . . . 瑞羽つ . . .」

殺氣でたけど私つて分かつた瞬間  
抱きついてきた。

「ルーに触んな馬鹿皇月」

馬鹿だね、皇月。学ぼうよ?  
志紀もいるんだからね . . .

「ヒイイツ . . . い、嫌だ! !」

ドカッ

「つてえええ! ! ! ! 志紀酷え! ! !」

自業自得でしょ。

志紀が強い事分かつてんのに。

「煩い」

私の手を握ってソファーに座った。  
隣に座ると膝に寝転がってきた。

「ズルいい！？」

何が？てか煩い皐月

「 . . ルー . . . . .

ふわふわしてゐる志紀の髪を撫でると、  
気持ちよさそうに目を閉じた。

・ . . . . 猫みたい。

最初は威嚇して、懐けば引っ付いてくる。

「うあーーーーーココでイチャつくなあツー！」

イチャつくって・・・そんな事してないし。

「ルー……ここも煩い」

不機嫌そうに私の手を握つて扉を開けた。

「行くなら瑠羽を置いてけ……！」

皐月オール無視で。

バタン・・・

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・・・。」

どこに行くのかわからぬけど、  
沈黙で進んでく。でもこの静けさは、  
心地いいものだった。

キイイ

着いたのは、空に有輝に近い屋上・・・・・  
でもそこには

「臥龍 . . . . .」

眩いた瞬間志紀が私を後ろに隠した。

「お前に話がある」

佐竹稜がはつきりとした口調で言った。  
こいつは似てるんだ、有輝に。  
顔とか声じゃなくて総長としての雰囲気が。

「私は無い」

有輝の顔が思い浮かんで、涙ではないのに  
泣きそうになつて怖いから。

「俺がある。お前は何に怯えてる?」

ほひ回じ。有輝も言つたよね、私達に。

【お前等は何に怯えてんだ?】

私と志紀。一人で大人人数と喧嘩してた。

「…・・・・・」

志紀が何かをいつた。

「は？」

「黙れツ」

そんなに殺氣だしていいの？

ドンツ

「ツ」

後にいた私が邪魔だつたのか、

志紀に突き飛ばされた。

普段はしないけどキレると周りが見えなくなる。

「『瑠羽』？」

椎名千年、山岸歩夢、加島昴が  
寄つて「いや」としたけど自分で立ち上がる。

志紀を止めないと . . .

「志紀 . . . . .」

志紀に近寄った。

「瑠奈ちゃん危ないよーーー！」

山岸歩夢の言葉も無視して近寄る。

ギュウ . .

前から抱きついて静かに呼んだ。

「——志紀 . . . . .」

「 . . . . あ . . . . .」

殺氣があせりつて止氣になつた。

「ルー……ジめん……」

突き飛ばした事とキレた事を言つてゐるんだ  
と思へ。

「ん。大丈夫。」

ちょっと背中がズキズキするけど  
これくらい大丈夫。

「嘘……帰ろ。」

それさえも分かつちゃうみたいだけど……

「家で冷やすから……」

「わかつた」

「ルー・・・」

家に帰りソファーでボーッとしてると  
アイスノンと湿布を持った志紀が  
眉を下げる近寄って来た。

「背中・・・見して」

言われた通りに服を捲つて背中を向けた。

「・・・めん」

シユンとする志紀はやつぱり仔猫。  
・・・可愛い。

「大丈夫だよ」

ヒヤッと背中にアイスノンのあてられて  
熱を持つた所が気持ちいい。

「赤くなってる・・・」

じゃあアザになるかな。  
それくらいどうも思わないけど。

冷たい感覚が離れて柔らかい感じがする。

ビクッ

「し、あ・・・」

背中に唇を這わせてる事に気付くのに  
少し時間がかった。

「んつ・・・」

チクリと首筋に痛みが走ると共に  
唇が離れて湿布が貼られた。

「ルー・・・背中、痛い?」

服も下ろされて前から抱きしめられてる。  
優しく背中を撫でられながら。

「冷やしてくれたから大丈夫だよ」

志紀にふにゅと笑いかけた。

多分、私が笑えるのは志紀の前だけ。

「ん・・・よかつた」

ウトウトしてて眼も虚ろな志紀を見ると  
眠いみたい。

「寝る？」

「ルーも・・・」

ベッド一つあるけど・・・

でも志紀が近くにいる方がよく寝れる。

「二二九」譜一

私の部屋のベッドに入つて寝転ぶと志紀も寄つてきたからスペースを開けようと奥に詰めると引き寄せられた。

「離れないで」

哀しそうな声色に切なくなつて  
ぎゅっと抱きついた。

「離れないよ」

優しく囁いて。

「二十九」

• • •

「那，那是哪裏？！」

教室に入つて椎名千歳がこっち向いた瞬間叫んで、今この状況。

その叫びにこっちを向いた臥龍達も教室の奴らも陸都も固まつてゐる。

「瑠羽さんー？そ、それ・・・」

それってどれよ。

「嫌だアああ！－！－！」

勝手に叫んで泣きながら去つていった  
陸都。 . . わけわからんない。

「えと . . . 瑠羽ちゃん . . . ？その首の . . .

加島昂に言われた事も  
わけわからなくて手持ち鏡で  
指差されたト「」をみた。

「 . . . ああ」

納得。でもそんな気にする事?

「誰にやられたんだ！？俺が潰してやる……」

なんでそんな怒つてんの？

「誰つて……志紀？」

昨夜の冷やしてた時の首筋の痛み。  
あれだと想つ。

「……俺だけど」

眠そうだけじ握つてゐ手は絶対離さないで  
隣にいる。

「はああああああーーー？」

「ぬきこつて……

「ちよ、何平然と言つちやつてんの！？

当たり前ですけど的な雰囲気おかしい！！！  
た、確かにスキンシップ多いけど、  
まさかそんな関係だつたなんて・・・！  
付き合つてんのか！？そつだよな？！  
つーか昨日も疑問だつたんだけど！！

“家に帰る”つて何！？普通“送る”だろ！？

マシンガントーク・・・。うざ。

うざい。皐月並にうざい。

コイツラ嫌いだから尚更うざい。

「付き合つてないし・・・」

私が付き合つたのは有輝だけ。  
志紀も皐月達とは違うけれど・・・

「一緒に住んでるし・・・」

「　「　「　ええええ！――？」「　」「

教室中の人間が叫んだ。

「じ、じじじやあなんでキスマーク・・・？」

志紀に触られたりするのは嫌じやない。  
むしろ安心するんだ。だから抵抗しない。  
・・・皐月とかがやつたらふつ飛ばすけど。

「志紀の気分・・・？」

結構な気分屋だしね。

「気分でやつやつ事するの？」

志紀もかなり独占欲強いし・・・  
わざわざこんな服で隠れないトコに  
つけたのも他の男に触られないためでしょ。

「うん」

有輝や皐月、陸都、蜜、大翔みたいに  
志紀も私も認めた人ならOKらしい。  
有輝だけはキスしたり恋人らしい事を  
するのもよかつたみたい。

「じゃあ瑠羽は処女じゃないのか……」

「…………なにこいつ。死ねばいいのに。」

「この手で殺してあげよつか?」

「…………ハハハ」

つい声でちやつたし。

ほんとめんどくさい奴ら……

さつきからずつと白崎陽の視線が痛い。  
視線つてゆうか睨まれてる?

「ハヤハヤハヤ。志紀、どうか行け」

とりあえず気持ちだけ表しといた。

「ひど!…あ、次りつくんの授業だから  
サボらんほうがいいぜ?殺されるし……」

陸都?尚更都合がいい。

無言で携帯とりだして陸都のメモリーを

だした。

『ただいま電話に出る事ができません。

ピーッとこう発信音の・・・ブチッ』

なんでお出ないわけ?

「志紀のでかけてみて」

・・・・・ぱりぱりでないらしー。

「仕方ないか・・・」

出来ればかけたくなかった。アレ。

「もし・・・《おつはよ!・・・いやー瑠羽から

電話してくれるとか感激!・・》

「わつ・・・・《マジ!の店こ毎こはなー・・・  
今なら死ねる!・・・・》

じやあ死ねよ。

「り・・・『あ、んで何の用ー?』

ブチッ

『え・・・今なんか聞こえた・・・』

「臯月。陸都知らない?

知らないんだつたら馬鹿に用はない」

『い、いめんなさい・・・

えと陸都はいじにいます・・・』

「あつや。じゃ、サボるつて伝えて」

『・・・はい』

電話を切ると引きつた顔でこりりを見る

臯龍達。

「り、りっくん呼び捨て・・・?

臯月つて・・・もしかして・・・・・・・・

・・・陸都の事今更?

「理事長・・・」

「やつだナゾ」

( ( ( ( 瑠璃ちゃん何者? ) ) ) )

## Eleven

千年 s i d a

「みゅう . . .」

「この状況 . . . 何! ?

「んーっ 棱きゅーん」

「ツ . . . / / / / /」

瑠羽が棱に抱きついて猫みたいになつてゐる。  
いつものシンシンしてゐるのとちがつて  
もの凄い甘えてるから棱が . . . 可哀想。

「瑠羽 . . . 酔つてないよお?」

「えー? ? 酔つてないよお?」

棱 . . . 羨ましいけど、俺は理性持たない。  
絶対。見てるだけでやべえし . . .

「なんで今にかぎつてアイツいねえんだよ」

「アイツ . . . 海藤志紀。今日は休みらしい。  
んでこいつは . . . 僕ら臥龍の倉庫。

「志紀はねえ〜今日風邪なんだよおー  
お家でねんねしてりゅのま

馬鹿に看病任せりゅのまつて言ひて  
瑠羽の馬鹿つて誰だよ？

「志紀があ寂しがるといけないから  
早く帰んなきや駄目らのま

あんなやつほつとねばっこのこ . . .

「海藤が好きなのか？」

稜の眼が少し曇った。

「うん……だあ……しねや……」

そんな事に気付かない瑠羽は答える。

「でもねえ好きなの ． ． ． に

志紀の大切なひ、と・・・ちや・・・つた

あれ？ 様子が、可笑しい

「」ぬ、なさ・ハア・い・はつ・ゆ、や・」

「……瑠羽？」

「 もう、 もう 、 う、 く、 と、 ま、 み、 か、 か、 と、 」

なんて言つてるかわからない。

「おこ……アイツ呼べ……早く……」

怒鳴ってる稜をあまりみた事なくて  
固まつた。

「海藤？ 瑠羽ちゃんが . . . 臥龍の . . .

でも鼎だけは瑠羽の携帯で海藤にかけた。  
耳に携帯をあててないこっちにも

海藤の怒鳴り声が聞こえた。

「し、き . . . ツハア、志紀 . . .

10分もしないうちに下がつるさくなつて  
海藤が来た事がわかる。

その間瑠羽はずつと海藤を呼び続けてた . . .

「ルー！――！」

荒々しく扉が開いて海藤が入ってきた。

「つてめえひ . . . ひ . . . ！」

瑠羽を抱きしめて俺らを睨む海藤の

殺気が半端なくて思わず震えた。

「紙袋持つて」――――

稜が言つて昂が持つてきたけど  
それを瑠羽が突き返した。

「志紀が……いれば、いらない……」

海藤に抱きついている瑠羽の呼吸が  
もとに戻ってきた。

それを見て胸が苦しくなった。

同時に瑠羽にこんなにも必要とされてる  
海藤が羨ましくなった。

「ルー……落ち着いた?」

わざとまづつて変わって、

優しい声、優しい表情で話す海藤。

「うん……あれ、志紀熱は……?」

「あー・・・それは「志紀」？」

『気まずやつに話す海藤を遮つて、  
知らない声が聞こえた。

・・・・・

瑠羽 s i d a

「うん・・・あれ、志紀熱は・・・？」

「あー・・・それは「志紀」？」

過呼吸おこしちゃつて氣付かなかつたけど

志紀つて熱あるんじやないの？

そんな疑問を抱いて聞いたら

口口にいるはずのない声が聞こえた・・・

「あ、みーつけ。ここつてどつかの族の  
溜まり場? なんでこんなトコにお前が  
つてソレ・・・誰?」

大翔  
・・・・・

「顔見せてーっ」

蜜 . . . . .

「おい、駄目だつて . . やめっ」

ぐいっと肩を引かれて顔をみられた . . .

「ルーちゃん . . . ?」

「え? こんなトコに姫がいるわ . . け . . . ない」

扉の近くで溜め息が聞こえて目をやると

鳳丹と陸都。

「ルー . . . ちや、ん」

「姫 . . . ?」

ルーちゃんって呼ぶのが蜜で

姫って呼ぶのが大翔。

「ふえ . . ルーちゃんツ」

ぱりぱり泣きだしちやつたし . .  
どうじょり . .

「蜜？泣かないで。あ、どうじょ . .  
アメ持つてない . .」

「ルーちゃんツ . .

ああ . . もう仕方ない . .

ちゅつ

「泣き止んだ？」

蜜の頬にキスするとピタリと泣き止んだ。  
そのかわり真っ赤になつたけど . .

「ツルーちゃん／＼／＼／＼

抱きついてきたけど私は今志紀の膝にいるわけでして……

「ルーに触るな蜜」

志紀にハニの如く叩き落とされる。

「…………痛い」

「ルーも蜜なんかにキスしちゃ駄目」

拗ねたよつこいつ志紀はやつぱ可愛い。

「頬つべだか・・ツんう・・・ふ・・あ」

ありえないと思います。

普通人がいっぱい見てる前キスする・・・?

「ルーの全部俺のモノ」

有輝の馬鹿など」と除いて性格似てきたよ。

「だああ！――！イチャつくなつつつてんだり――！志紀お前俺らの前でキスするなんざあいい度胸してんじやねえか！――！」

・・・有輝の馬鹿な部分は皐月が似たんだよ。

「煩い。今日が初めてじゃないし」

ほんとこいつやそうだけど、嬉しそうな顔の志紀。

「それと――いつ言おうか迷つてたけど、瑠羽の首筋のキスマーク！――！あれお前が付けただろ！――」

コレ付けられてからまだ今日で2日だし消えるわけない。

「男除け。と俺のモノつて印

そういうながらまた首筋に舌を這わす。

「んんっ . . . ちよ、志紀 . . .

私が首とか耳とか弱い事わかつてやるから  
志紀も相当なうだよ。

バシヤツ

「うみゅう . . .

冷たい . . . てぬづかクラクツする . . .

「おい . . . それ . . . 酒 . . .

白崎陽を除く臥龍、星月達が思った。

( ( ( 理性に負けそう . . . ) ) )

「志紀だあ . . .

しかもせつときより質が悪い。

制服に酒を被つたから透けて下着が見える。

「んッ　．．．やあ　．．．．．し、せこ　．．．．．」

チクリと回 JIT 口に痛みが走る。

「流石にヤバイ　．．．．．」

さらに濃くなつたその印を撫でながら  
志紀が呟いた。

「

## Twelve

「ツ . . . たあ」

・ . . . じじ、 びじゅ。

頭ズキズキするし . . . 体怠いし . . .

「ルー . . .」

耳元から聞こえた声の方を向くと、  
眠そうな志紀。

「志紀! リビング! . . . ?」

周りが見えないからわからない。

「俺の部屋 . . .」

ああ、なるほどね。

私が全く知らない部屋で寝れるわけない。

「昨日蜜達と会つたあたりから記憶飛んだ……」

過呼吸起こして、志紀がきて、蜜達と会つて  
その後……どうして家に?」

「俺りでここに帰つた」

まあ、そうだよね……

「皐月達は?」

「皐月と陸都は学校。あとは……」

「バンッ!!

「ルーちゃん見つけ……!」

蜜と大翔がきた。

「姫ー……おはよ

蜜、重いよ。蜜も男なんだから私よりも  
大きいんだよ？」

「あーっ！…志紀ズルいつ

蜜、朝からテンション高い……  
頭に響く……

「俺もルーちゃんと寝たかったーー！」

今度寝てあげるから静かにして……

「蜜あんまり騒ぐと姫が怒るよ。

姫、二日酔いだろうし

相変わらず笑顔が黒いね。

「大翔……蜜重い」

「はいはい」

「いー やー だああーー！」

一生の別れじゃないんだから、  
そんな叫ばなくとも・・・

「ルー 大丈夫？」

「ん、 大丈夫」

人が一人いないだけでこんなに静かになるの？

「大翔、 ご飯作ってた」

そういうえばいい匂いする。

少し腹空いたしそろそろ起きよ・・・

「行こ。 蜜も騒いでるし」

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ - ୧୯୫୦

ガチャヤ

「蜜……騒がないで」

頭痛い。

「ルーニョんちおはよーーーー！」

駄目だ、無駄だつた。  
飛びつかれるのもキツイ。

「姫、水飲んで」

「ありがとう」

蜜が怯えてるんだけど・・・何したの?

「で？いくつか聞きたい事あるんだけど」

．．．やいはやつぱ見逃してくれないね。

「まあ、志紀。こいつから姫の居場所知つてた？」

「こひから、質問の攻撃が始まつた。」

## Thirteen

「大翔 . . . 痛い」

「後5分」

はあー . . . もう足の感覚ないんだけど  
正座30分つて厳しすぎ . . .

「つう . . . ルーちゃん . . . . .」

今の私に助けを求めるでよ。  
目の前に魔王がいるんだから。

「 . . . もういいよ」

「やつたあー！」

「 「はあ . . . 」」

大翔のお許しがでて喜ぶ蜜と

溜息を呴へ志紀と私。

「姫と志紀は学校行く?」

「「行かない」」

質問攻撃と正座でもう腹だから行つても無意味

「わ～じやあ今日ま～すと一緒ー。」

じゃあ今夜も無理か . . .  
族潰し . .

志紀が来てからずっとやめてなごの。」

「ルーチャンとお出掛けしたって」

「姫、どうする?」

お出掛け . . . . . まあ今まで心配かけたし . . .

「行こ!」

「やつたあー! ルーチャン大好き!」

だからさ・・・蜜も可愛くても男なんだから  
痛いし重い。

「蜜・・・」

ボソッと志紀が呟いて蜜を剥がした

「志紀ひつじーい！ー！」

「はいはい。姫、準備してきて」

「うん」

その頃アノ人達は・・・陸都 s i d a

「席つけ

俺が教室に入ると静かになつた。

「瑠羽さんと志紀さんはサボ・・・欠席」

ズルいよなあ～瑠羽さんといふなんて . . .

「つづくへん 瑠羽なんで休み？？」

うせえ。てめえらに関係ねーし。  
つーかこいつらが原因だろ？が。

「ひぬせえ黙れ」

昨日の瑠羽さんを思い出すとイライラが蘇る。  
こいつらが瑠羽さんと関わるから . . .

「な、なんか怖いよ . . .」

フンッ当たり前だ。苛ついてるし。

「血飢」

さ、行くか。理事長室、臥房の所に。

ガチャ

「おひの陸都へおかえり～」

「…………。」

キモイいくらニーナーナヤシヒルロハイシ。

「不機嫌だな～どうしたあ？」

この喋り方イラつく。黙れよ。

最近髪薄くなつてかもつて気にしてほんへせこ・・・

「瑠羽さんが来ない・・・」

つまらない。瑠羽さんがいないと。

瑠羽さんが消えてた間俺等は必死だった。  
でも瑠羽さんに俺等が敵うわけなくて・・・  
だからここに現れたとき驚いた。

「仕方ねえよ。蜜がいるんだしな」

蜜め・・・つーかなんで瑠羽さんは稜達といった?

「やあ、こいつらが連れてつたんだい？」

「ここよなあ、せつてえ出掛かへる」

「だよなあ」

「うるさい……」

「だからあんまり蜜達と繁華街に  
来たくない……パンダ達がつるさい。」

「…………。」

志紀も人嫌い特に女が嫌いだから不機嫌。

「ルーチャンなんか欲しいものないの??」

それに比べて上機嫌な蜜。  
パンダ達はシカトしてるけど……

「服

「じゃ、買ひにいこつか

スキップでも始まりそうな勢いで手をひかれた。

「 ウィーン ・・・

「 こりつしゃいませえ～」

「 ここで買づの? 」

「 こんな女の子つて感じの店で?  
もつとシンプルでいいんだけど ・・・ 」

「 ルーちゃんこれ着てみてづ 」

「 え ・・・ 」

蜜が持つてきたのは淡いピンクの  
短めのワンピース。

「 私にピンクは似合わないと思づ。 」

「 ね? 絶対似合づからーーー 」

仕方ないな . . .

こんな可愛い顔で“ね？”なんて言われたら  
断れないでしょ . . .

「ふあ . . . 眠い . . .」

とりあえず志紀は眠いらしい。  
大翔はニコニコしながらみてる。

「わかったよ . . .」

仕方なく試着室に入つた。  
着替えて鏡でチェックしたけど変なところはない。  
似合う似合わないは別として。

「ルー終わつた？」

「うん」

これ渡した張本人消えてどこ行つたの？

「つ . . . . !」

「え・・・？志紀？」

試着室から出ると志紀にすぐ戻された。  
・・・そんなに似合つてない？

「んつ・・・ふ、う・・・」

「ルー・・・可愛い」

可愛いってありえないし・・・

それよりココ店だし試着室なのにキスすると  
誰かに見られる可能性があるので・・・

「姫、それ蜜が買つんだって。

だからそのまま着ておいて」

ほら、大翔がいた。

「わあ！！ルーちゃん可愛いっ！！」

きつと貴方の方が可愛いし。

「ねえ向ひのアレなあに?」

あの服にバッグとヒール、アクセサリーも  
買つてくれてその格好で歩いてる . . . と、

キヤアアアア ! ! !

叫び声? が聞こえた。

「嫌な予感 . . .

聞き覚えのある声聞こえるしね。  
確實にあいつら . . . 佐竹稜達。  
族の名前は忘れた . . .

「 . . . 姉。 戻る?」

「 戻る」

つて言って戻るうとしたのに . . .  
どつかの馬鹿が。

「あー ! ! ! あれ瑠羽じやん ! ! !」

「え、ほんとだ！ 瑠羽」

椎名千年　．　．　眼がいいらしい。  
ここからあそこまで結構距離がある。  
人の顔が判別できない距離にいる。

「無視して」

「「「うん」」

「　．　．　．　」

そのまま回れ右して歩いてった。

「離して」

はずなのに、

こいつなに？ 瞬間移動並の速さで動いた奴。

5、6秒前まで離れてたのに今私を掴んでる。

．　．　．　．　佐竹稜。

「無理」

「わざこ。限りなくわざこ。

「 . . . . . 」

無言で佐竹稜の手を放つて私を引き寄せた  
終始無言の志紀。

「ルーちゃん大丈夫？？」

「うん」

蜜つて過保護だよね . . . 腕掴まれただけだし。  
まあ私の周りはみんな過保護だけど . . .

「姫、あいつら殺つてもいい？」

「駄目」

なんかキレてる大翔。  
何に怒つてんの？

「お前らこないだもいたけど誰？」

「お前達に教える必要はない」

蒼龍は有名だつたけど幹部、総長の顔は  
知られてない。  
だから知らないで当然。

「なんで女なんかに・・・」

これも気に食わない。  
こいつらに興味なんてせいぜいないけど  
そいつのパンダ女と同じでわれてるのが嫌。

「・・・帰る」

「こつらに会って一気に疲れた。  
もつ帰りたい。」

「ええ！？ルーシャン待つてよおーーー。」

「姫、車いる？」

「寝る・・・」

車使う程の距離でもないし……歩きでいい。

「…………んッ…………」

何された?今。

「ばーか

「こいつに……佐竹稜に何された?

佐竹稜にキスされた……

「あー…………お前俺らのルーチちゃんに向するのー?」

「殺す…………」

「別にいい。帰りたい」

私も殴りたいけど眠いしかえりたい。

「でもひー・・・」

「いこひで言ひてゐるの」

別に初めてなわけでもないし、  
そんな気にする事でもないと黙へ。

「つなんでそんな冷静なんだよ」

した本人がなにいつてんだか。

「ひひでもこいから」

なんか感情があるわけでもないし。  
ひひでもこいから寝たい。

「稜にキスされてひひでもこいこひ子

初めてみたあ！！」

「やひば瑠羽こいなーー！」

なにがこいのか意味わからない。

「ふあ . . . . .」

眠い . . . . .

「ルーチャさん、おこで

ふうふうと蜜に嗜つてつた。

「寝てこよ

近くまでこつたら持ち上げられて

横抱き . . . 所謂お姫様だつこされた。

いつもなら降りじつてこうなど、  
今は眠い。寝たい。

そのまま眼を閉じた。

「ん . . . . .」

可愛いな。

「ん……」

俺の腕の中にいるルーリちゃんを見て  
つぶつと囁く。

「姫寝ちゃったし家に帰る?」  
志紀も寝ただし

さつきからずっとうつらうつらしている。  
でもわざわざ男を抱っこしたくな。

「あ、やあ……」

寝言、だよね……

……有輝を想ってるのは知ってるよ。  
でもね、ルーちゃんが苦しんでばかりじ  
有輝が悲しむよ——

・・・・なんだろう? 暖かい。

「しゃあ・・・・・」

お腹あたりを締め付ける感覚がして  
目が覚めた。

「おはよ、ルー」

「ん・・・今何時?」

くるりと後ろを向いて、向き合つ様に  
寝転がった。

・・・・・近い。

「8時

もう、蜜達帰つたのかな . . .  
物音がしない。

「（じ）飯何がいい？」

「炒飯」

好きだね、炒飯 . . .  
どつか食べに行つても炒飯ばっか。  
. . わたしも似た様なものだけだ。

「作るから待つて」

で、起き上がりうとしたんだけど。

「 . . 志紀？」

「俺もいく」

抑えられて動けなかつた。

「作りにいく」

キッチンにきて炒めてるんだけど、  
後ろからだきついてくる。

いつもまじでベッタリだな・・・

「・・・。」

炒め終わってお皿に盛り付け、  
折りたたみ式の小さいテーブルに運んだ。

「どうしたの?」

いつもなら正面に座るのに今日は  
私を膝に乗せた。

「ルーが、あいつらの所に行つて・・・  
俺・・・要らないって・・・」

夢、か・・・あいつらは臥龍の事だろ?。  
私が志紀を要らないなんて言つわけない。

「志紀が私を必要としてくれる限り私は志紀から

離れなこよ

志紀に煙草ならいって言われたら私は . . .  
どうなるんだろ？

あつとせんの事をやめる。

有輝がいなくなつて、壊れて . . .  
でも志紀や星月達の存在で生きている。

「俺がずっと一緒にいたつて言つたら . . .

「こら

志紀といられるなら本望。

“愛してる”志紀が昔私に言つた。  
でもその時私は有輝を失つた绝望で、  
応えなかつた。

「ルー . . . 愛してる」

今も有輝を愛してる。  
でも、同じくらい . . . それ以上に  
志紀を愛してる。

「 . . . 私も」

「え . . . 「

なんで驚く?

「俺、は有輝じゃ . . . ない . . . 「

「知ってる」

もしかして私が志紀のキスを受け入れるのは  
有輝と重ねてる、とか思ってたのか。

「じゃ . . . あ、なんで . . . 「

「志紀だから好き」

よくキスしたり触ったりしていくけど、  
それ以上はしてこない。

それは、有輝に遠慮してるんでしょう?

「ツ . . . ルー . . . 「

「ん？ 炒飯冷めるよ

志紀の膝に座つたままお皿を手に取つて食べ始めた。

まだ暖かい……

「ありがとう……ルー

「ん……」

優しい笑顔を見せてくれて、一瞬魅入ると軽く唇にキスされた。

「ツン、ふ・つ・う・・・

離れたと思えばまたすぐキスされ、いつもみたいな深いキスじゃなくて噛み付くようなキスがくりかえされた。

「はあつ・・・」

唇が離れた時にはもう力が体から抜けてて

動けなかつた。

お互い好き合つても私達に付き合つとかない。  
この関係は変わらないから。  
何も、変わらない。

だけど・・・今まで以上に触れてくると思ひ。

「 . . シ . . . 」

「 ルーは、俺の . . . 」

また首筋にキスして印を残した。

「志紀…………暑い」

「…………」

「もつ…………」

ほら、陸都が泣きそり。

「志紀さんつ…………授業聞いてください」とい

朝からずーっと弓付いてくる。  
別に嫌じゃないけど暑い。

「うう…………体育祭の種目決めするので、  
自分で決めてくださいよ?」

無視され続けた陸都はシュンとしながら  
黒板に種目を書きはじめた。

面倒だな……サボるつか。

「志紀どれやるの?」

「面倒……」

「面倒」と思つた。

「瑠羽さん……サボっちゃ駄目ですよ……」

「……嫌」

「選手にならりますよー?」

「……いんじやない?」

「……決めるだけ決めてください」

それは出なくともいいって事だよね。

「まあ、騎馬戦やる人~」

「」「」「さこひ……」、「」

クラスのほとんどが挙げてる . . . .

そんなに騎馬戦好きなの？

「瑠羽ちゃん勘違いしちゃ駄目だよ？」

騎馬戦って言つても殴り合ひみたいな  
ものだから」

つて説明してゐる三岸歩夢もキラキラした  
顔で手挙げてるけど。

臥龍達も佐竹稜と加島昂以外挙げてる。

「騎馬戦の奴ら他の競技にも出るよ？」

次、500mリレーーーー

こんな感じで決めていつたんだけじ、

私は500mだけのつもりが借り物競争も。

志紀は800mと陸都に無理矢理騎馬戦。

「絶対サボる . . . .

てゆうか志紀が殴り合いに出たら  
重傷者大量にでると思つ。  
強いからね。

「ふあ～・・・眠こ」

昨日はお風呂よく寝ちゃったから夜寝れなくて  
寝不足になつてしまつた・・・

「・・・俺も」

もううん昨日一緒に寝てた志紀も同様。

「・・・お前ら昨夜何やつてたんだよ」

椎名千年の質問は無視して立ち上がる。

「ソレ、寝れないから理事長室に行こう。」

「志紀さん、瑠羽さん、？」

「どうしてですかああ～・・・」

教室をでると叫び声が聞こえたけど

聞こえないフリ。

アレに関わると面倒だし。



## Seventeen

「皇田、ベッドに潜りこむ。

「ビーベー…ついで志紀も一緒に寝る？」

「こいつも何か叫んでるナビ無視。  
眠って、めんどいし。」

「…志紀、暑いって…」

ベッドに寝転がっても抱きしめられたまま。  
本気で暑いか。

「…。」

「…いや…睡魔が…」

「スースー…」

田を瞑ればすぐ寝れた。

志紀 side

「ルー . . . . .

昨日は驚いた。

今まで俺がルーに触れても嫌がらないのは  
俺を通して有輝を見てるって思つてたから。

俺だから受け入れてくれた事に、  
とても嬉しさを感じた。

「ん . . . . 志紀 . . . .

「え？」

寝言で俺を呼んだのは初めて。  
いつも有輝を呼んでて苦しそうだった。

今までルーは有輝のモノだつたから  
色々やりすぎない様に制御してきたけど、

ルーは俺に愛してるって言つた。

「ありがと……ルー」

一人ぼっちだつた俺。

一人ぼっちだつたルー。

ルーと出会つて一人ぼっちじゃなくなつた。

それから有輝達と出会つて、

ルーが有輝と付き合つようになつても

俺の側にいてくれた。

有輝も良い気なんてしないのに、  
黙つて見守つてくれてた。

皐月、陸都、蜜、大翔……

直接言つてやらないけど感謝してる。

「愛してる」

眠つてるルーにキスして立ち上がつた。

-----

「んー……ふあ……」

田が覚めてボーッとしていると変化に気付いた。

「志紀……？」

あの温かい体温が、無い。  
どこ行った……？

私から離れる事なんて、無かつたの。」

「志紀……？」

急に不安が襲ってきてベッドから飛び出した

「……」

理事長室を出て教室に向かへ。

「はあ……」

いない、どうして？

「のくらいこの距離を走ったくらいで、焦りと不安で息切れし始めた。

「あれ、瑠羽ちゃん…どうしたの？」

「志紀…………見なかつた？」

加島昂が焦った私を見て寄ってきた。  
いつもなら聞いたりしないのに、  
いきなり消えた不安で聞いていた。

「海藤？ 知らないけど…………

志紀も私が消えた時こんな不安だったの？」

「え、瑠羽ちゃんー？」

携帯、お願い…………出て…………

《ルー……？》

「つ・・・志紀・・・」

よかつた・・・

《・・・・・どうした?》

「どうしてなの・・・・?」

《・・・・・教えられない》

「な、んで・・・・」

教えられないって事は私と会えないって事?

「志紀・・・つ・・・・・!」

《ルー、すぐ帰るから》

志紀の“すぐ”は数分、数時間じゃない事は  
知ってるんだよ。

数日、もしかしたら数ヶ月。

「ついたくなるの……」

『……少しやる事があるだけ』

枯れたはずの涙は、  
また私の大切な人が遠ざかる事によつて  
溢れてきて。

「…………う…………」

『ルー泣かないで……ちゃんと帰るから』

「約束したのに……」

『……めん』

お互いまつ離れないって約束。

『でも……俺一人でケジメ付けたいんだ』

「絶対……帰ってきてよ」

『帰つてくるよ』

なんのケジメかなんて分かつてゐる。

志紀の家族の問題だから。

電話を切つて誰もいない廊下にズルズルと座り込んだ。

「 . . . つ . . . く . . . う」

昨日いきなり愛してるなんて言った理由も昨日と今日ずっと抱き締められてた理由も全部わかった。

「志紀 . . . 」

また笑えなくなるけど許して。  
貴方がいないと無理だから。

「愛してる . . . 」

いつのまにか右手の薬指に通されているネックレスの指輪とは違う指輪。  
左手じゃない所が志紀らしい。

指輪の内側に彫られた言葉。

love you forever.  
(あなたを永遠に愛します)

「おー、瑠羽また漬したんだってな

「 . . . . .

志紀がいなくなつて2週間。

夜は蒼桜として毎晩族漬しをしてゐる。

「 . . . なあ、辛いのはわかるけど

志紀が帰ってきた時お前がボロボロだと

あいつはどう思つ?

わかってる。

やり過ぎてる事くらい。

でも、やめられないから仕方ない . . .

「それに瑠羽にあれほど執着してたあいつが

自ら離れたんだ。

あいつだって辛いはずだろ

「 . . . . .

後から聞いた話では私以外はこの事を知つてたらしい。

．．．忘れてた。

近くにいる人が急に消える事がこれほど怖い事だった事を。

有輝の時に思い知つたはずだったのに。

「大丈夫ですよ瑠羽さん！！

いくら志紀さんでも体育祭出なかつたら留年ですから！！」

陸都、そんな事言つても明後日だよ。  
体育祭。

「．．．．．ありがと」

今、授業中だけどこれ以上二人に  
気遣わせたくないし教室戻ろうかな。

「じゃあね．．．」

教室にいると千年、歩夢、昂が

話しかけてくる。

いつの間にか少し仲良くなつてたりするから自分でも驚き。

「瑠羽ひやあん……昴が怖い……」

いつも歩いて歩夢が抱きついてくるのも

日常になつた。

「ん……昴、あんま怒っちゃ駄目だよ」

「……馬鹿が一人いると大変なんだよ……」

白崎陽には嫌われるけど、

前みたいに睨まれる事はなくなつた。

「……瑠羽」

稜は口癖みたいに用も無いのに私を呼ぶ。

「何」

「……」

「 . . . 用が無いなら呼ばないで」

たまに倉庫に連れてかれたりして、  
悪い奴らじやない事はわかつたけど  
やつぱり志紀の側が一番安心できる。

「 んーう 今日帰り俺の家寄つてかない?  
いい事し「死にたいの?」

「 . . . . . イエ、昂様滅相もない」

こいつらの馬鹿なやつとつが蒼龍と  
たまに被る。

「 瑞羽ちひさん?..ビンじたの?..」

「 . . . なんでもない」

無意識の内に私が族潰しのターゲットを  
決めるとき、最近は臥龍の敵の中でも  
汚い族を潰してゐる。

「 もつすぐで体育祭だね!! 頑張りうね!!」

「ん . . . .

体育祭は好きじゃない。  
暑いしなによち面倒くさこ。

「瑠羽ちゃんは走るの速い?」

「普通 . . . .

そういうえば臥龍と蒼龍は連合を組んでた  
らしい。  
だから有輝や皐月達の事を知ってる。  
私と志紀がいた事は知らないって  
皐月から聞いた。

「俺速いんだよ!—見ててね!—」

「うん . . . .

「歩夢ばっかりずりーぞ!—

「瑠羽!—俺も見てろよ?」

「のうなあやこリヤドリする時もある。

「あらまあ五円螺いと瑠璃ちゃんが怒るのよ?」

まあ、嫌いじゃないけど。

体育祭当日———

「瑠羽さん・・・」

志紀はいない。

「・・・大丈夫。ちゃんと出る」

志紀が一人で頑張つてるんだから、  
私は待たないといけない。

「瑠羽ちゃん!—!」(ちー)ちーちー

「歩夢、暑苦しいよ」

「むーつ鼎涼しそうじゃんか!—!」

「暑じよ?」

テナントに入ると、

本を読みながら歩夢の相手をしている昂。

昂に突つかつて歩夢。

なんか死んでる白崎陽。

椅子に座って寝てる稜。

「 . . . . 自由」

千年はわざわざ女に囮まれてゐのを見た。

「瑠羽ちやーん」

語尾にハートが付きそつた勢いで  
歩夢が抱きついてきた。

「 . . . 暑い」

「今から障害物リレーなんだあ！  
出るから見ててね！！」

「ん、わかった」

返事をすると、元気に走つていった。

「 . . . . .

田線を下にすると、指輪が田に入つて  
グッと吸いつな。

「 . . . 瑞羽」

「 . . . . .

「海道を信じる」

「 . . . . .

「必ず帰るって約束したんだろ？」

なによ、寝てたんじゃないの。  
なんでわかるの、私の不安が。

「 . . 分かってる

それでも時々思つてしまつ。

家族の問題が解決したら、  
そのまま戻つてこないんじゃないかなって。

「あいつはお前を裏切つたりしねえ」

私も歩夢の競技を見た。  
稜はそれだけ言つてまた寝はじめたから

「たつだいまーーー！見てた？！見てた？！」

「あかえつ。いねれこせんせ」

『君はもう死んでいいの！』

卷之三

まつたく・・・なんていいながら本を読む  
昂は完全にお母さん。

「…………速かつたね。でも怪我してる

頬が切れてて血が滲みかけてる。

そこに触ると歩夢が真っ赤になつた。

「あ、わ···つ／／／」

「 . . . . ?」

今日は暑いし日焼けした?

「／＼／＼ほりほりつ 瑞羽ちゃん行かなきゃ……」  
「 5 0 0 ミリレー並んでるよ！――」

ぐいぐい押されて日向に出された。

「 . . . . 暑 . . . . 」

ずっと日陰にいたからか、  
急に暑くなつてクラクラする。

『パンシ』

第一走者が走り出した……確か私のクラスは、  
臥龍の幹部補佐の旭。

私はアンカーにされた。

「暑、い . . . . 」

この炎天下の中突つ立つてるとか死ぬ。

「 . . . やつと」

やつと私の前の列が戻ってきた。

バトンを受け取って走る。  
暑いから本気じゃないけど、  
一位だから問題ない。

「瑠羽ちゃん速ーいー！」

どつかから聞こえてきた声は多分歩夢。

一位のまま「一」ルした。

「う、はあ・・・・・」

ちよつと体がヤバイけど。

「あ・・・・・」

視界が暗くなつていく時に  
臥龍の皆が焦つて走つてくるのが見えたの

-----.

「 . . . ん . . . . . 」

「 よかつた . . . 起きた」

「 — — . . エ、 」

目を覚ますと保健室で、

「 ルー . . . ただいま」

隣にいるのは待つてた人。

「 つー . . . 志紀 . . . つん . . . 」

触れるだけのキスをして抱き寄せられた。

「倒れた原因是栄養失調、睡眠不足、過労  
それに精神的に不安定だつて？」

「 . . . . .」

「こんなに喋る性格じゃないのに。」  
怒らせた？

「 . . . 臥龍と仲良くなつてゐるし」

いつからいたの？

「 . . . 他の男に触るし」

歩夢に触った時？

「 . . . ルーは俺のなのに」

「んつ . . . ふ、あ . . . ッ . . .」

唇が離れた時はもう酸欠状態で、  
頭は真っ白だった。

「瑠羽が族潰し毎晩やつてゐるつて聞いた」

．．．じつせ鼻円あたり。

「何も食べないし寝てないつて

食べない事もないし、2、3時間寝てる。

「そんな事してたらルーの体がもたない

「．．．志紀がいないとダメ」

食べないつて言つても喉に通らないから  
仕方ない。

寝ないつて言つても眠れない。

「これからはずっとこらむ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3314s/>

---

ありがとう

2011年9月3日14時39分発行